

# イタリア留学研修報告

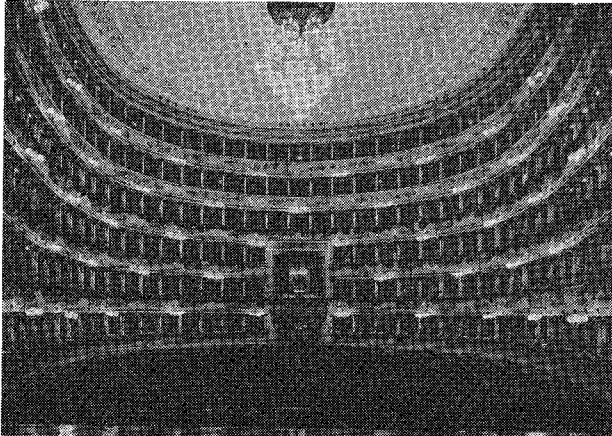
La relazione delle mie ricerche operistiche in Italia

山 田 健 司

私は1982年12月17日、日本を出発し、1983年 8月28日、帰国致しました。その間イタリア、ミラノにおきまして、リア・グッアリーニ (Lia Guarini) 教授、フランコ・フェラーリス (Franco Feraris) 教授のもとでイタリアオペラ、歌曲を研究して参りました。今回の留学の大きな目的は、この両教授のレッスンを受ける事ともう一つ、多くのオペラ、コンサートを鑑賞することにあります。そしてこれらは、私が留学前に考えていたより、はるかに得るものが多く、又、この音楽を取り巻くイタリアの気候、風土、イタリア人の気質等に触れ、そこで生活したことは貴重な体験でありました。今回の留学で最も強く感じましたことは、想像していた以上にオペラというものが国民の中に根づいているということ、そしてその象徴とも言うべきオペラ劇場が実に素晴らしく、又、レッスンを通じて導き出される声、音楽というものが常にその劇場という空間をはっきりと想定された上での指導であり、オペラ歌手とは劇場で経験を積みながら育っていくものだという確信を得たことでした。又、個人レッスンについては両マエストロとも基本的な発声についてのレッスンが非常にウェートを占め、いわゆるベル・カント (Bel Canto) 発声の概要を、私なりにつかめたことは、大きな収穫でした。しかしながらこのことは、まだ理論的にも実践的にもおぼつかない状態ですので、これからの演奏活動を通して少しずつ試みながら、そして、それを教育的な面にも生かして行きたいと願っている次第です。又、これから述べる劇場、並びにオペラ・コンサートにつきましては、私がその都度メモしたものをまとめたものです。かなり主観的な要素が強いと思われますが、その点御容赦いただきたいと存じます。最後にこの紙面をお借り致しまして、今回の私の留学に際しまして御援助下さいました相愛学園、並びに父兄会の皆様に心から感謝申し上げる次第です。

## I スカラ座及び各地のオペラ劇場について

### ① ミラノ・スカラ座 (Teatro Alla Scala)



(スカラ座内部)

この歌劇場の外観は、ウィーンやミュンヘンのそれにくらべると、決して立派ではないが、内部の華麗さは目を見はるばかりで、7階建の客席は、全て金色の装飾がほどこされ、円い天井には豪華なシャンデリアが下がり、席々の深紅との色彩の対比がいっそう豪華さを加えている。そして、その構造は舞台が凸型に作られ、広さ780㎡、高さ30.5m、間口35m(エ

プロンステージを含まず)あり、客席は馬蹄型であり、収容人員は約3,000人である。この馬蹄型の歌劇場は、非常にオペラ劇場としてふさわしいと考えられる。それは第一に、音響が非常に素晴らしい事である。私は、プラテア (Platea) と呼ばれる1階フロアー、パルコ (Parco) と呼ばれる個室型の三階席、ガッレリア (Galleria) と呼ばれる天井桟敷等、様々な場所でオペラを聞いたのであるが、どの場所からもわだかまり無く演奏を聞く事ができた。これは日本の多目的劇場に比べて非常に違う点ではないだろうか。そして、その形であるが故に客席と舞台とが一体となり、演奏家の奏でる音に包まれるという感がある。第二に、この馬蹄型の劇場にしか見られないボックス型のパルコがあるため、非常に豪華な雰囲気をかもし出す。しかしながらこのボックス型のパルコは場所によっては通常 前列二席、後列四席の二列となるため、後列の客は舞台を見る時、立って見なければならず、しかも部屋の奥になるために、時として音がこもるという欠点も持ちあわせている。第三に、これはスカラ座独特とも言えるのだろうが、舞台機構の素晴らしさは、他に類を見ない。奥行、幅、高さとも十分過ぎる程にとってあるため、傾斜舞台も自由に作れ、舞台転換も非常に速い。最後に、私が一声楽家として感じた卒直な感想を述べさせていただくと、オーケストラ及び合唱の水準が高く、オーケストラでは弦がよく鳴っており、合唱のハーモニーは素晴らしく、その中からはソリストまがいの声も聞こえて来るほどである。そして一般聴衆の耳が実に肥えており、演奏への反応もかなり露骨で、良くない演奏に対してはその拍手をさえぎる「シー」という声がかかり、又、アリア等の後奏が終わらないうちに拍手でもしようものなら、これもまた「待て!」という「シー」の声がかかる。だが、この歴史ある素晴しきオペラの殿堂にも一つの危機が訪ずれようとし

ている。最近、ナポリで起った劇場火災で、それに対する当局のチェックが厳しくなり、イタリアの主な劇場では立見席がなくなるという事態に落ちいり、ローマでは劇場が閉鎖されたとも聞く。このスカラ座もその影響を受けて立見席が廃止され、モンセラ・カヴァリエ（1983年3月28日）のリサイタルの時には、それに対する抗議のビラが、ガッレリア席からばらまかれた程である。

この事はただ単に安い切符で見られなくなったというだけでなく、真にオペラを愛し、オペラを育てて来た、いわゆる通の聴衆の劇場への道をせばめたと言っても過言ではあるまい。この事で、このスカラ座の質も危うくなるのでは、との声もあり一日も早く劇場が改善され、立見席でも聞ける日が来る事を祈るばかりである。

#### ② ミラノ、ピッコラ・スカラ座 (Piccola Scala)

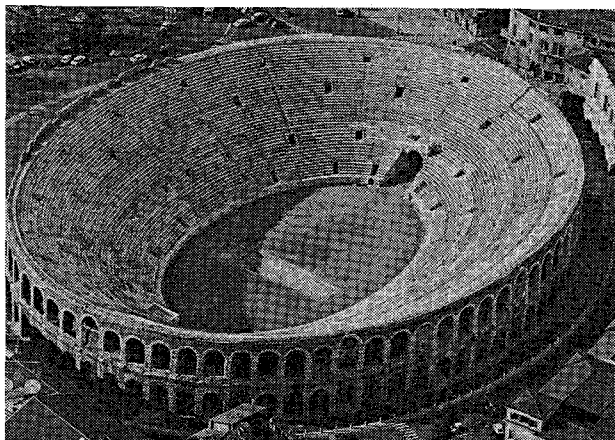
スカラ座の楽屋入口の隣りにあり、内部はロビーがとても狭く、客席も400～500といった感じのその名のとおりのピッコロであった。興味深かったのはオーケストラボックスの三分の二程は舞台の下にもぐっており、舞台と客席とが間近で、歌い手の様子が手にとるようにわかったことである。ここではモーツァルトのブッファものや、ナポリ楽派のインテルメッツォ等がよく上演されているそうだが、今シーズンはこうした演目がなかったのは残念であった。

#### ③ フィレンツェ テアトロ・コムナーレ (Teatro comunale di Firenze)

アルノ川の河岸にあり、外観は何の変哲も無い地味な建物である。内部も日本でよく見かけられる多目的劇場のそれと変わりなく、客席数は約2,500席で音響も期待したほどではなかった。しかしながらイタリアにおいては近年、スカラ座と双壁といわれるぐらい質の高い演目を上演しており、私も二度足を運んだが、なかなか切符の入手が難しく、当地在住の人に頼んだほどである。特にこの劇場での五月音楽祭というのは、数多いイタリアの音楽祭の中でも歴史が古く、規模も大きいと聞いている。

#### ④ ヴェネツィア テアトロ・フェニーチェ (Teatro Fenice)

外観は歴史ある劇場としての気品を十分に備えているが、他の劇場と比べて入口は小さく、小じんまりとした感じである。内部はスカラ座と同じく馬蹄型で、1873年、再建とあって、かなり古いが豪華でとても美しい。収容人員は1,500人で舞台もしいて大きいとはいえないが音響の良い事で定評がある。特筆すべきはこの劇場でのヴェルディオペラの初演が多く、エルナーニ（1844年）、リゴレット（1851年）、椿姫（1853年）、シモン・ボッカネグラ（1857年）等々がある。



アレーナ劇場

⑤ ヴェローナ・アレーナ野外劇場 (Arena di Verona)

この野外劇場は、ローマ時代の闘技場だったものを、1913年からオペラを上演する場所として利用しはじめ、外観は二層の回廊からなり、かなり朽ちてた部分もあるがよく補修され、原形を保っている。内部はローマ時代のものとは思えないほど完全に整っており、その音響の良さは奇跡とまで

いわれている。実際、私の聞いたかぎりでは確かによく響くが、どんな歌手でもよく聞こえるというのではないようで、かなり声を持った人でないとこの劇場で主役を務めるのは大変のようである。収容人員は2万人で、毎年、七月下旬から八月下旬までの約一ヶ月間、それこそ世界中からオペラファンが集まり、客席はほぼ満席という話であるから、この劇場が世界で唯一、オペラが興業になる由縁がわかる。

⑥ ウィーン・シュターツオペー (Staatsoper)

電車通りのオペルリンクに面した正面は四本の円柱で支えられ、伝統ある美しさを感じる。内部は当時、世界最高をめざしたと言われるだけあって、客席をとりまくようにロビーが三ヶ所あり、その広さ、シャンデリアの豪華さは目を見はるものがある。馬蹄型の客席に入ると全体の色調が白亜で統一され、金色まばゆい装飾がかざられている。しかも大きからず、小さからず、理想的な大きさのように思われる。舞台も奥行、幅、高さともスケールが大きく、オーケストラボックスもかなり深くとってある。イタリアの劇場と違うところは、一階の平土間にも立見席があり、五階のそれより料金は少し高いが、かなり安く見る事が出来る。ちなみに座席は全部で2,209席という事である。



シュターツオペー全景

⑦ ウィーン・フォルクスオペー (Volksooper)

ウィーン市中心部より少し離れ

た場所にあり、客層もシュターツオーバーに比べてぐっと大衆的になり、夜八時開演というのに子供連れの親子が大勢来ていたのにはいささか驚いた。劇場自体は外観も内部も小じんまりとしていて、オペラ劇場というよりむしろ芝居小屋、という感じすらした。収容人員は1,692名で特にロビー等は狭く、休憩時間はお客でごったがえして大変なものであった。内部は普通の多目的劇場にボックス席をミックスした感じで、特に印象に残ったのは、ミュージカル等もやるせいかスピーカーが壁に組み込まれていたことであった。

⑧ バイエルン シュターツオーバー (Bayerische Staatsoper)

1963年に再建されたこの劇場は、バイエルン王朝ヴィテルスバッハ家の旧王宮であるレジデンツの東側にあり、正面の大列柱は圧感である。内部はかなり円型に近い馬蹄型で、旧来の馬蹄型のそれと違うところは、一階の後部座席の一部が二階座席の天井の下に入っていることと、二階からは二階正面の貴賓席以外はすべてパルコ型式ではなく、どこからもよく見えるようになっている。この為パルコ型式による音響弊害を取り除き、従来の馬蹄型の劇場から一歩進んで現代的な建築が取り入れられている。舞台は予備ステージを入れると25,824平方フィートという広土で、近代的な設備が全て整っていると聞く。ここでの立見席はすべて席の番号が決まっており、前売りで買えるシステムになっているのは、さすがドイツらしい感じがした。

⑨ バイエルン アルテス レジデンステアター (Bayerische Altes Residenztheater)

小さな中庭付きというこの劇場は、レジデンツの中にあり、1753年の建築で第二次世界大戦からも守り抜かれた貴重な建物である。内部は、世界で最も美しいロココ調劇場と言われるだけあって贅のすべてをつくした感があり、舞台の両そでの四本の円柱は総大理石で作られ、あらゆるところ彫刻で飾られた壁面装飾は、それは筆舌に尽くしがたいほどのものであった。客席はせいぜい500席程の小さなもので、舞台も幅、奥行ともそれほど広くないが、ただ高さだけは十分にとってあるので音響的にはかなり良く響くよう作られている。こういったことから、演目もここではモーツァルト等の古典物が多く上演されているということである。

⑩ ザルツブルク フェルゼンライトシューレ (Felsenreitschule)

この劇場は、私がこちらで見た劇場の中でスカラ座と共に最も興味を覚えた劇場であった。舞台は背後の丘の直下にあり、その自然の岩山を背景に三層の回廊らしきものがすでに作られ、あたかも古代の円形劇場の一部を舞台にすえた感じであった。

又、舞台下手には大きな木を植え舞台天井は開閉が自由自在という、それこそ舞台作りの上で色んな可能性を秘めた超近代的劇場であるといえよう。客席は1,549席で、一階、中二階、二階といった、ごく普通の劇場の形と同じで、舞台の奥行が狭く、間口が広い、日本の歌

舞伎場の舞台に似ており、オペラより演劇等に適した劇場といえよう。したがってオペラにおいてはむしろ、この舞台に合わせた形のオペラ作りが必要で、今回のフェスティバルではモーツァルトの「イドメネオ」と「魔笛」が上演されていた。特筆すべきは音響の良さで、これほど歌手の声が皆良く聞こえた経験ははじめてであった。やはり、背後の岩板が反響板の役目を果たしているせいかと思われた。

## II 鑑賞したオペラ・コンサートについて

### ① ジョルダノー作曲 (U. Giordano) オペラ アンドレア・シェニエ (Andrea chénier)

1982年12月29日 ミラノ、スカラ座

フランス革命時代のパリを舞台に実在の詩人、アンドレア・シェニエを主人公をしたオペラで、私は今回、初めてこのオペラを鑑賞した。この日のスタッフ、並びにキャストは、指揮、リッカルド・チャーリー (R. Chailly) 演出、ランベルト・プージェリ (L. Puggelli) アンドレア・シェニエにホセ・カレラス (J. Careras)、ユワエー・マッダレーナにエスタティーヴァ (S. Eustatieva)、カルロ・ジェラルドにピエロ・カプッチェリ (P. Capucilli) というメンバーであった。音楽は実に流麗で説得力があり、今売り出しの若手指揮者、チャーリーもきびきびとした棒さばきでオーケストラも良く鳴っていた。演出は、割にオーソドックスで、もう少し奥行を使ってほしかったし、照明ももう一工夫という感じであった。しかしながら、初めてみるスカラの舞台はさすが超一流のオペラ劇場であると感心した次第である。歌い手は、カレラスがもう一つ不調で、意外にマッダレーナを歌ったエスタティーヴァという新人がとても素直な声で好感がもてた。カプッチェリは期待にたがわず素晴らしい声で、特に第三幕で歌われる有名なアリア「祖国の敵」は、当夜の聴衆をうならせた。

### ② ヴェルディ作曲 (G. Verdi) オペラ エルナーニ (Ernani)

1982年12月30日 ミラノ、スカラ座

ヴェルディ初期のオペラで、日本ではあまり上演される機会がないが、今期のスカラ座開幕のオペラということで期待して足を運んだわけであったが、当夜は残念ながら初日のメンバーとは違い、割に若い歌手で構成されていた。指揮、エドアルド・ミュラー (Edoardo Müller)、演出、ルーカ・ロンコーニ (Luca Ronconi) エルナーニにランド・バルトーニ (Lando Bartoni)、ドン・カルロにアントニオ・サルヴァドーリ (Antonio Salvadori)、シルヴァにジョルジョ・スルヤン (Giorgio Surjan)、エルヴィラにアプリレ・ミロ (Aprile Millo) というメンバーであったが、全体的にドラマの運びと音楽の運びがしっくりいかず、指揮者と歌い手のコンタクトがうまくいっていないように感じた。

演出も、もう一つすっきりせず、装置はかなり立派であったにもかかわらず、それがあま

り効果的に使われていない気がした。歌手は押しなべて若さが表面に出て持ち味を充分に出し切れない様子で、特にテノールは、声にばかり神経を注ぐあまりオーケストラとずれる部分が何ヶ所も見られた。それに反してコーラスのアンサンブルの見事さには驚かされた。やはり、このスカラの舞台に立つ歌手は超一流でなければ似つかわしくないのかも知れない。昨夜のアンドレア・シュニエの余韻がまだ残っており、期待に反したエルナーニであった。

③ エディタ・グルベローヴァ・リサイタル (Edita Gruberova)

ピアノ、イルヴィン・カージュ (Irwin Cage) 1983年1月7日 ミラノ、スカラ座

スカラ座ではオペラだけしか見れないと思っていたが、リサイタル形式のコンサートが、有名な歌手ばかり集めてシーズン中何回かあると聞き、早速その予約席を取った。そして、その最初のコンサートが何と一度は聞きたいと思っていたグルベローヴァであった事は非常に幸福であった。この日のプログラムは、モーツァルト、ブラームス、シュトラウスのリートであったが、とても歌のうまい人で、声も決して大きい方ではないが、よく整っていた。もう一つこのコンサートでイタリア人がドイツリートに対してどのような反応を示すか興味があったのだが、やはり、プログラム全体が終った段階ではあのオペラでの興奮らしきものはうかがえなかった。グルベローヴァ自身もそれを感じたかどうかはわからぬが、アンコールにいたっては彼女のセールスポイントである高音部を存分に披露し、最後には拍手が鳴りやまない程観客を魅了した。この時ばかりはプロ歌手の根性を目のあたりに見せつけられた気がした。



エディタ・グルベローヴァ

④ ヴェルディ作曲 (G. Verdi) オペラ ファルスタッフ (Falstaff)

1983年1月20日 フィレンツェ、テアトロ・コムナーレ

前回のスカラ座のエルナーニで、今話題のバリトン、レナート、ブルゾンを聞く機会を失ったので、今回、フィレンツェでファルスタッフのタイトルロールを歌うという事を耳にして出向いた次第である。指揮は、カルロ・マリア・ジュリーニ (Carlo Maria Giulini) 演出は、

ロナルド・アイヤ (Ronaldo Eyre)、ファルスタッフにレナート・ブルゾン (Renato Bruson)、フォードにトーマス・アレン (Tomas Allen)、フォード夫人にカティア・リチャレルリ (Kattia Riciarelli) 他、のメンバーであった。期待のブルゾンは、レコードでしか聞いた事がなく、今回初めて舞台を見たわけだが、実のところ少しがっかりした。

というのは、それほど声も飛ばないし、ファルスタッフの役柄としては、その役作りがあまりにも真面目すぎ、芝居も、もう一つふっきれていない気がした。他のキャストは、すでにこの舞台を昨年ロンドンで公演している事もあるて手慣れており、脇役も粒がそろっている感じであった。舞台は全体的な色調が上品にまとめられ、照明もかなり効果的に使われていた。ブルゾンに対する期待が大きかっただけに、やはり舞台とレコードではこれほど違うものだ、つくづく感じさせられた一夜であった。

⑤ ドニゼッティ作曲 (G. Donizetti) オペラ ルチア (Lucia di Lammermoor)

1983年2月13日 フィレンツェ テアトロコムナーレ

先日のグルヴェローヴァのリサイタルがあまりに素晴しかったので、この人がフィレンツェでルチアを、又、相手役のエドガルドをクラウスがやると聞き、是非とも聞いておきたいと思いかけてつけた。

指揮は、ジャンルイジ・ジェルメッティ (Gianluigi Gelmetti) 演出は、ピエール・ルイジ・サマリターニ (Pier Luigi Samaritani) キャストは、エンリーコにヴィンチェンテ・サルディネーロ (Vicente Saldinero)、ルチアにエディタ・グルベローヴァ (Edita Gruberova)、エドガルドにアルフレード・クラウス (Alfredo Kraus)、他であった。幕が上がったとたん、とても幻想的な色調の照明で、舞台は下手に長い階段を作り、その遠近がうまく利用されて興行のある非常に美しい舞台であった。グルベローヴァのオペラはこれが初めてであったが、リサイタルで示した歌のうまさに加えてその演技は卓越しており、特に有名な「狂乱の場」ではそれこそ彼女の独壇場で、あまりの素晴らしさに会場の客席から全員同時にため息がもれたほどで、このような経験は私も初めてであった。エドガルド役のクラウスも、相変らずヴェテランの味を見せ、この人の得意とする高音部の声も安定しており「狂乱の場」のすぐ後、というハンディのあるアリア、「間もなく私に安息の場を」も観客の拍手をさらっていた。指揮もオーケストラも全体として緊張感があり、かなり水準の高い舞台であった。

⑥ ルチアーノ・パヴァロッティ・リサイタル (Luciano Pavarotti)

ピアノ レオーネ・マジェーラ (Leone Magiera) 1983年3月7日 ミラノ、スカラ座  
今やドミンゴと並んで押しも押されぬ大テノールであり、我がイタリアの誇りでもあるパヴァロッティのリサイタルとあって当夜は超満員でテレビ中継もあり、これまでのリサイタルとは違った熱気が場内にたちこめ、この人の人気のほどをつくづくと知ろしめた感があ

た。当夜のプログラムは、古典イタリア歌曲、トスティ、アリア、オラトリオ等々、バラエティーに富んでおり、それは一曲一曲、素晴らしい歌であり、声であった。パヴァロッティの声は、息の流れがそのまま声になっている感があり、聞く方の身体が開放されていくようでとても快く、高音部も決して無理なく聞こえてくる。私は初めて彼の生の声を聞いたのだが、スカラ座という舞台にふさわしい素晴らしい素晴らしいコンサートであった。

⑦ ヴェルディ作曲 (G. Verdi) オペラ リゴレット (Rigoletto)

1983年3月16日 ウィーン、シュターツオーパー

イタリアを離れて初めて見るドイツ圏のオペラ舞台が、このシュターツオーパーのリゴレットであった。スカラ座とは又違った本当に素晴らしい劇場で、開幕前から胸が高なるのを覚えた。指揮は、リッカルド・ムーティ (Riccardo Muti) 演出は、サンドロ・セクイ (Sandro Sequi) マントーヴァ公爵にフランコ・ボニゾーリ (Franco Bonisoli) リゴレットにレナート・ブルゾン (Renato Bruson) ジルダにエディタ・グルベローヴァ (Edita Gruberova) 他のキャストであった。ムーティの音楽は少し走りすぎの感があり、もっと歌い手に歌わせても、というところが何箇所かみられ、若さが表面に出すぎたようで、聞いていて多少落ちつかないテンポであった。又、現在では非常に上演される事が少ない、いわゆる原典版にしたがって慣例的な高い声を全部なくすというものであった。これはムーティの意向によるものなのか劇場側の意向なのかかわからぬが、イタリアでこのような上演でしようものなら決してお客は承知しなかっただろう。演出はごくごくオーソドックスであったが、一つ気になったのは、リゴレットとスparaフチーレの一幕の二重唱がリゴレットの家の前で行なわれた後、その外壁が自動的に動き、家の内部が現われるといったやり方であったが、この壁引きが何ともしっくりこず、何とか舞台を回転するとかで、その場所と違う設定には出来なかったものかと思った。又、ブルゾンのリゴレットはフィレンツェのフェルスタッフの時と同様、全体的にまじめすぎる傾向が強く、父性愛は非常によく出ていたのだが、もう一方の対外的な強烈な性格描写の拍力に欠けていた。ジルダのグルベローヴァは、可憐な娘をうまく演じ、特に父親に対する甘えや願望といったものがよく表現されていた。願わくばこの人の得意とする高音部の声を聞きたかった気がした。マントーヴァ公爵のボニゾーリは初めて聞くテノールであったが、寄姿に恵まれ声も中音域が充実していて、高音部もかなり安定していたが、前日、トロヴァトーレのマントリーコを歌ったばかりという事で、途中から声が出なくなり、一オクターブ下げて歌うというアクシデントがあり、全体の足並みを乱した事は残念であった。ヨーロッパではよくこのような事があるとは聞いていたが、本当に貴重な体験をさせてもらったものである。

## イタリア研修報告

### ⑧ ドニゼッティ作曲 (G. Donizetti) オペラ ドン・パスクアーレ (Don Pasquale)

1983年3月17日 ウィーン、シュターツオーパー

オペラブッファをイタリアで見たいと思いながらなかなかそのチャンスがなく、ウィーンで見る事になるとは思ってもみなかった。指揮は、エドガルド・ザイペンブッシュ (Edgar Seipenbusch) 演出は、ヘルゲ・トーマ (Helge Thoma) キャストは、ドン・パスクアーレに、ジュゼッペ・タディ (Giuseppe Taddi) ノリーナに、パトゥリチア・ワイズ (Patricia Wise) マラテストに、ハンス・ヘルム (Hans Helm) エルネストにペーター・ケレン (Peter Kelen) であった。

何といっても当夜の見ものはタディのパスクアーレで、当年67才だそうだが、その歌唱、音楽性、演技、どれをとってもパスクアーレそのままであった。往年の一時代を代表するバリトンとしてレコード等でその名はよく知っていたわけだが、生の舞台を見るのは初めてであり、近頃カラヤン指揮のファルスタッフで再び脚光を浴び、話題になっていただけに聞く機会を得られ本当に幸福であった。他の出演者もなかなか達者な演唱で、良いアンサンブルを聞かせてくれた。特にノリーナのパトゥリチア・ワイズは容姿も美しく演技も抜群で、タディとのからみは観衆を沸かせた。

### ⑨ ロッシーニ作曲 (G. Rossini) オペラ セビリアの理髪師 (IL Barbiere di Siviglia)

1983年5月9日及び16日 ミラノ、テアトロ・ナツィオナーレ

もともとスカラ座の公演であったが、舞台をテアトロ・ナツィオナーレに移しての公演であった。今回は切符の入手が比較的スカラ座のそれよりも簡単であったことから二夜、第一夜は一階最前列、第二夜は二階席で鑑賞し、双方違った見方ができた事は収穫であった。指揮は、ロベルト・アッパード (Roberto Abbado) 演出は、ジャン・ピエール・ポネル (Jean-Pierre Ponnelle) 伯爵にパオロ・バルバチーニ (Paolo Barbacini) バルトロにエンツィオ・ダーラ (Enzo Dara) ロジーナにラクエル・ピエロッティ (Raquel Pierotti) フィガロにレオ・ヌッチ (Leo Nucci) 他、であった。演出は初演が1970年とあってかなり息の長い舞台であり、それなりに細部にわたって良く仕上がっていた。特に二幕のフィガロ、バルトロ、伯爵の三重唱のドタドタは最高で、バルトロの髭そりに使った長い前かけの、はしと、はしとを伯爵とフィガロが持ち、柱にバルトロをくくりつけてしまうなどは圧巻であった。又、フィガロ役のヌッチ、バルトロのエンツィオ・ダーラは何度この演出で歌ったか知れぬが心得た演唱で、大変に楽しませてくれた。指揮のロベルト・アッパードは、クラウディオ・アッパードの甥とかでまだかなり若い指揮者であったが、よくオーケストラをまとめ、若々しい軽快な音楽を聞かせた。

### ⑩ モーツァルト作曲 (W. A. Mozart) オペラ コシファン・トゥッテ (Cosi fan tutte)

1983年6月7日及び11日 ミラノ、スカラ座

## イタリア研修報告

当日は、指揮、リッカルド・ムーティ (Riccardo Muti) 演出、ミカエル・ハンプ (Michael Hampe) キャストは、フィオルディリージにエリザベート・コンネル (Elizabeth Connel) ドラベラにアン・ムライ (Ann Murray) グリエルモに、ミカエル・メルビィ (Mikael Melby) フェランドにルーディジャ・ヴォラス (Rueudiger Wohlers) デスピーナにアデリーナ・カスラベリ (Adelina Scarabelli) ドン・アルフォンゾにクラウディオ・デスデーリ (Claudio desderi) であった。

実はスカラ座でこれほど良いモーツァルトオペラを聞けるとは思っていなかったし、本当に「素晴らしい」の一言に尽きる公演であった。というのも、これまでこのスカラ座でのオペラ上演は、ほとんどイタリアものばかりであった事と、尚且つ割に重いものが多かったので、モーツァルトを久しぶりに聞いてホッとしたという気持もあったからかも知れない。ヴェルディの音楽は血沸き肉踊る、といった感が強いが、モーツァルトのそれは、聞き手の身体の中をあたかもそよ風が通り抜けていくようでとてもすがすがしかった。

その要因は、指揮者ムーティのテンポの良さと、演出のわかりやすさ、それに舞台の転換の良さがあげられる。又、歌い手は、スターこそいなかったが、皆それぞれの役相応の演唱で、美しいアンサンブルを聞かせてくれた。しかし、この日の演目、及びキャストリングは、イタリア人にとっては不満であったようで、観客の反応はもう一つであった。

だが私個人の意見としては、モーツァルト、特にこの「コシファントウッテ」に関しては、スターはいらない、むしろいない方が色々な意味でアンサンブルがうまくゆくし、今回の公演のように唯一のスターが指揮者であったことが逆に成功の要因であったように思えた。舞台はよく上演されるシンメトリーのセットで生まれ、カーテンを使ってレチタティーヴォを幕前で行ない、その間に次の舞台の転換をするといった具合で割にオーソドックスであったが、照明、装置、衣装、全て調和のとれた美しさであった。今までになかった演出面といえば、終幕のアンサンブルの「ドン・アルフォンゾ」と「デスピーナ」の扱い方を、賭けに勝った喜びよりも後味の悪さに重点を置いていた事と、二組の恋人同士が元通り収まった後も、お互いの相手にまだ未練を残しているといったリアルな場面を見せた後、最後に舞台が元に戻り、皆が再び我にかえるというかなり細い演出がなされていた。それにしてもこのスカラ座という劇場の機構は本当に素晴らしく、終幕に大道具があつという間にレールに乗り、両袖にはけて行く様はまさに圧感であった。

### ⑩ モーツァルト作曲 (W. A. Mozart) オペラ 魔笛 (Die Zauberflöte)

1983年7月29日 ミュンヘン、ナショナルテアター

この演目は日本でもポピュラーな作品で、ジグシュピールの代表作であり、このテアターの得意の演目ということで期待して出かけた。指揮は日本でおなじみのヴォルフガング・サヴァリシュ (Wolfgang Sawallisch) 演出は、アウグスト・エヴァーディング (August Everding)

キャストは、ザラストロに、クルト・モル (Kurt Moll) タミーノに、ゲスタ・ヴィンベルヒ (Gösta Winbergh) 弁者に、テオ・アダム (Theo Adam) 夜の女王に、ズディスラヴァ・ドナート (Zdzislava Ponath) パミーナに、ヘレン・ドナート (Helen Donath) パパゲーノに、ヴォルフガング・ブレンデル (Wolfgang Brendel) 他であった。

エヴァーディングの演出は、それはきめ細いもので、色々な舞台効果を駆使し見るものを飽きさせないものであったが、タミーノの笛にさそい出される動物の扱いのずさんさ、又、タミーノとパミーナの火と水の試練の場が盛りあがりに欠ける等、すべてにゆきわたらないのが残念であった。指揮のサヴァリッシュは手慣れた感じで、快調なテンポでこのオペラをまとめ、オーケストラもさすが安心して聞けるアンサンブルであった。歌い手ではブレンデルがひょうひょうとしたパパゲーノで拍手をさらっていたのと、モルのザラストロの落ちついた演唱が全体をひきしめていた。

⑫ モーツァルト作曲 (W. A. Mozart) オペラ イドメネオ (Idomeneo)

1983年8月1日 ザルツブルク、フェルゼンライトシュレー

このオペラはモーツァルトのオペラセリアの代表作で、ヨーロッパではよく上演されるとの事だが、日本ではなかなかお目にかかれない作品で私も今回初めてであった。指揮、ジェームス・レヴァイン (James Levine) 演出、ジャン・ピエール・ポネル (Jean-Pierre ponelle) イドメネオに、ルチアーノ・パヴァロッティ (Luciano Pavarotti) イドマンテにトゥルデリエーゼ・シュミット (Trudeliese Schmidt) イーリアに、ルチア・ポップ (Lucia Popp) エレクトラにエリザベート・コンネル (Elizabeth Connell) 他であった。ポネルはこのオペラが長く単調であるにもかかわらずかなりドラマ性を前面に浮きたたせる事で成功していたように思える。そして、このフェルゼン・ライトシュレーの独特の舞台をうまく使いこなしていた事が印象に残った。ただ群衆の場面で、上手下手の舞台下から這い上がってくる時、音楽の間以上に時間がかかっていたのはこの劇場の幅の広さからいっていたしかたのないことなのか、はたまた練習不足なのか残念であった。レヴァインのウィーンフィルは、それは透明度の



アルド、プロットティ、チェザーレ、シェピと共に

あるモーツァルトを聞かせてくれ、歌い手では何といてもパヴァロッティのイドメネオが断然光っており、意外にもこの人の当り役ではないかと思われるほどであった。他にはこのオペラ唯一のキャラクター役、エレクトラを演じたコンネルがすさまじいほどの演唱で、二曲のアリアは、それこそ圧感であった。日頃モーツァルトのオペラブッファばかり聞いているものにとっ

## イタリア研修報告

て、ドラマティックなモーツァルトを聞く事ができて素晴らしい一夜であった。

### ⑬ プッチーニ作曲 (G. Puccini) オペラ 蝶々夫人 (Madama Butterfly)

1983年8月13日 ヴェローナ、アレーナ野外劇場

今回は思いがけずタイトルロールを日本を代表するソプラノ歌手、林康子さんが歌うというので興味深く出かけた。それとこの日本を舞台にした作品が、このイタリアの地でどのような演出で上演されるかということも、もう一つの目的であった。円形劇場という事もあって舞台転換はすべて照明で行なわれていたが、蝶々夫人の家はオーソドックスなもので、この時点ではそれほど違和感を感じるものではなかった。しかし、結婚式の場面で群衆が出てくるなり、(予想はしていたものの)あまりの奇妙さに思わず苦笑してしまった。日本人とも中国人とも、はては何人とも知れぬ人達が皆、扇子を持ち、始終あおぎながら誰かれとなくおじぎをする様は奇妙奇天烈といった言葉がぴったりする感じであった。こうした中で2万人の観衆を前に林康子さんは、歌はもちろん、着物さばき、しぐさ等、素晴らしい出来ばえで、私の回りのイタリア人も幕が終る度に「日本人のヤスコは素晴らしい」と言って握手をしてくれ、この時ばかりは同じ日本人として本当に誇らしく思った次第である。他のキャストはピンカートンに、ベニアミーノ・プリオル (Beniamino Prior) シャープレスに、ロランド・パネライ (Rolando Panerai)、スズキに、フローラ・ラファレリ (Flora Rafarelli) 他であった。中ではシャープレスのパネライがヴェテランの味を見せ、手慣れた役作りが印象的であった。オーケストラは通常の倍近くの編成で、そのせいともう一つ不揃いのところがあり、指揮のマウリチオ・アレーナ (Maurizio Arena) も、デリケートさにかける点が気になった。それにしても満天の星の下、ただこの劇場でオペラをやるのが最高の演出であるように思えた。